



オピニオン
人新世に考える (1)
SCE・Net 中安 一雄

O-29

発行日：
2024年8月31日

本稿は 2024 年 7、8 月の SCE・Net 環境研究会定例会で話題提供したものをまとめたものです。

1 はじめに：人新世への流れ

「人新世」という言葉が聞かれるようになった。「人新世」は「ひとしんせい」又は「じんしんせい」と読まれる。2つの読みがあるのは、私立を「わたくしりつ」と読んだり「しりつ」と呼ぶのと同じで、人の好みによる。その考えの元には「地球環境に大きな変化が起きている」という認識がある。遡れば「宇宙船地球号」という考え方が提唱され、人類が運命共同体であることに気付かされたのが 1963 年。1972 年にはローマクラブから「成長の限界」というレポートが出て、地球規模の課題に目が向くようになった。

それらが投げ掛ける課題に対し有効な対策がなされない中、1996 年、国際標準化機構が ISO14001 を制定した。その背景には、気候変動への対応が急がれ、どのように環境活動を進めたらよいかという問題があった。誰もができる活動方法があると良いのだがという社会的要請があり、さらにその活動を確実なものにするため、その活動状況を第三者が評価する認証制度も創設した。その後 1997 年に京都議定書で目標が定められて具体的活動が義務化された。このような動きは企業の環境報告書に結び付き、さらに社会的責任の自覚から環境社会報告書へ、そして社会報告書、総合報告書へと進化している。この流れは社会はどうあるべきかという議論へと進み、国連が 2015 年、SDGs¹⁾としてその姿を示した。

近年、人新世という言葉が知られるようになったが、実は、この言葉は 2000 年に国際地質科学連合で提唱されたものである。ISO が制定された 4 年後である。その趣旨は、「**人類の活動が地球の歴史や環境など自然の様々なサイクルに決定的な影響を及ぼしている**」という**事実**から、現代を特別な一つの地質時代として認識すべきではないか、という提案であった。「人新世」は Anthropocene の訳であるが、ギリシャ語の Anthrops (人間) と kainos (-cene の語源) (新しい世) からの造語で、人間の新たな時代の意。) ISO とは別の動きではあるが、ISO と同じように地球環境の変化に気付いて問題視していた。実際どのような変化が起きているかという Steffen らの論文がある²⁾。(図-1、2 参照。)

人間にとっての大きな変化がいつから始まったかについては、3つの考え方がある。

- 1) 12000 年前・・・農業革命以降
- 2) 1780 年代から・・・産業革命以降
- 3) 1950 年頃から・・・第二次世界大戦以降

農業革命は人類にとって大きな変化ではあるが、地球規模の課題としては普通は産業革命又は第二次大戦後を考える。地質学会の関心は、地球に対する人間の影響は大きい、その地層の年代をどのようにして測定できるのか、ということにもあった。標準化石は存在しないから、別の指標となるものが必要なのである。いろいろな指標が調べられたが、有力な候補として ²³⁹Pu が見つかった。世界各地の地層の ²³⁹Pu を調べるとその地層が 1950 年以降であることが特定できることが分った。²³⁹Pu は人間が核実験で全地球にばらまいた廃棄物である。

地層の年代決定問題は決着しそうであったが、国際地質科学連合は70年～数100年にも満たない時代を一つの地質時代とすることは不適切と判断した。しかし、**人新世**という「地球と人類のあり方を見つめる危機感」は学会、分野を越えて世界的に注目が集まり、社会に浸透している。この考え方は人間社会や地球環境はどうあるべきかを提唱するSDGsの趣旨に通じるところがある。そこでSDGsの元であるISOから流れを追って、人間の地球におけるあり方を考えてみたい。

図-1 地球に起こっている変化 (1) 地球システムのトレンド²⁾

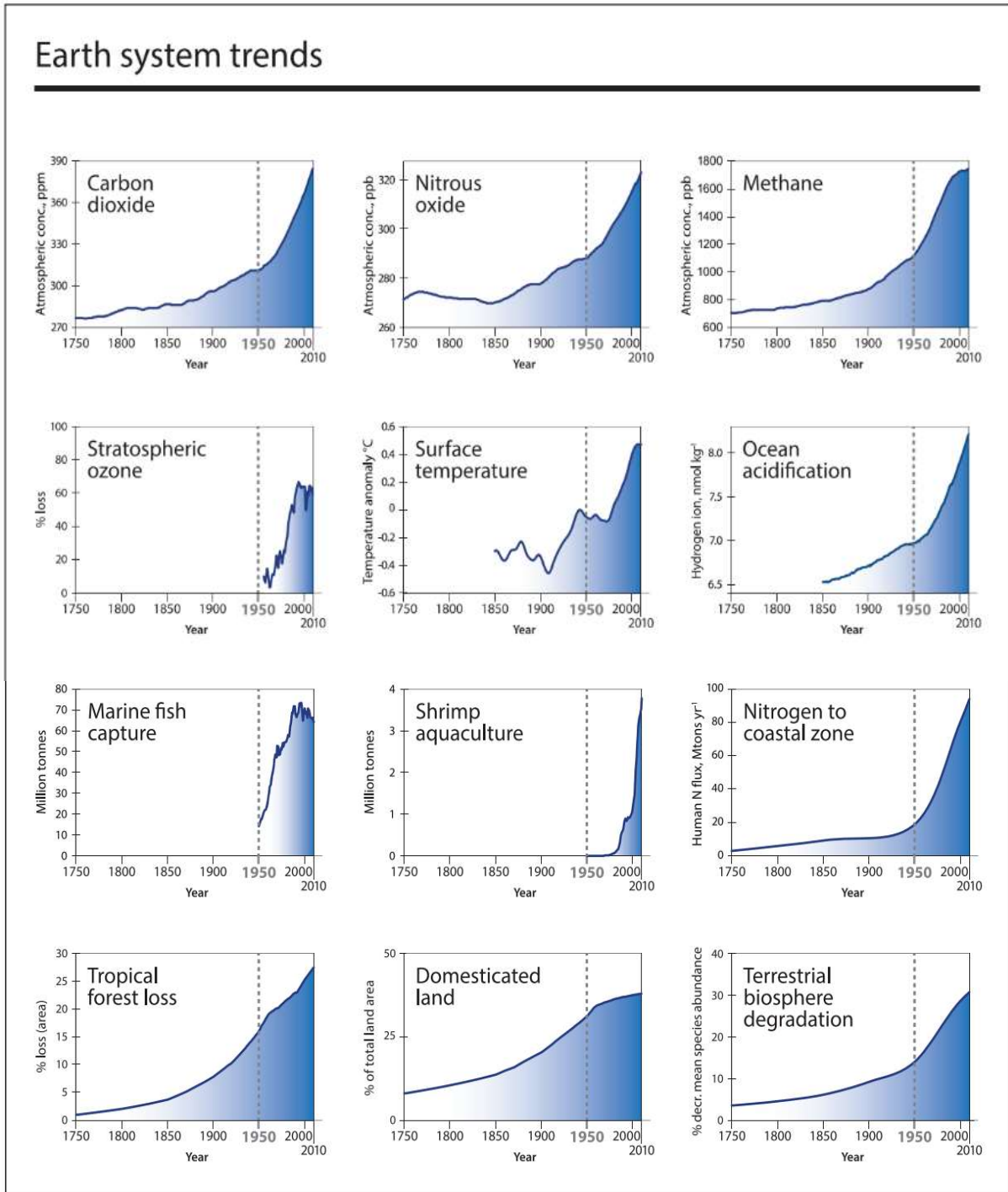
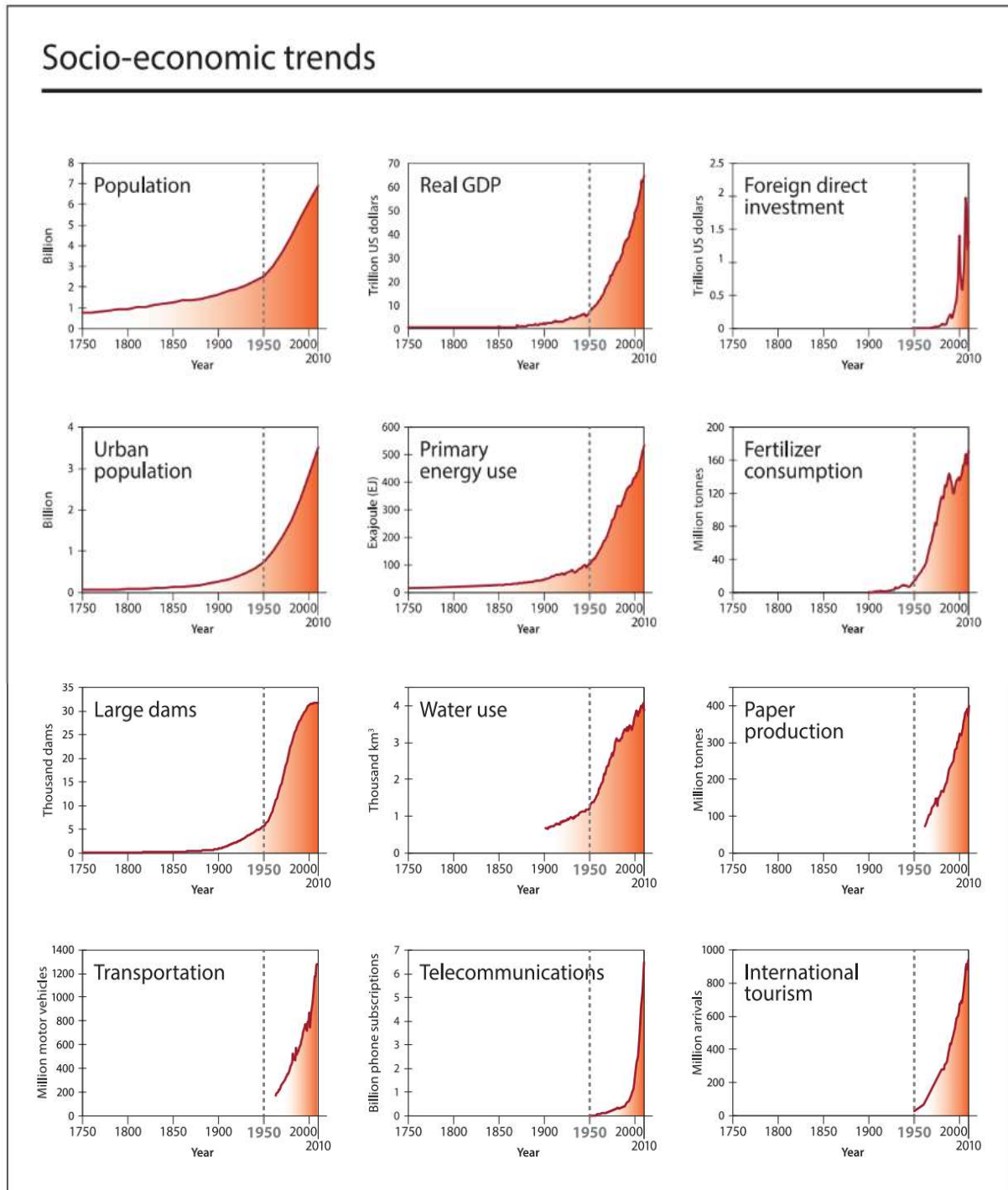


図-2 地球に起こっている変化 (2) 社会-経済のトレンド²⁾



2 ISOの本質と限界

ISO14001はその成立過程から分かるように、環境問題への取り組み方の枠組を世界中の知恵を集めてまとめ上げた活動方法である。いわば世界常識を集大成した「仕事の基本」なのだが、その本質は次の2点にある。

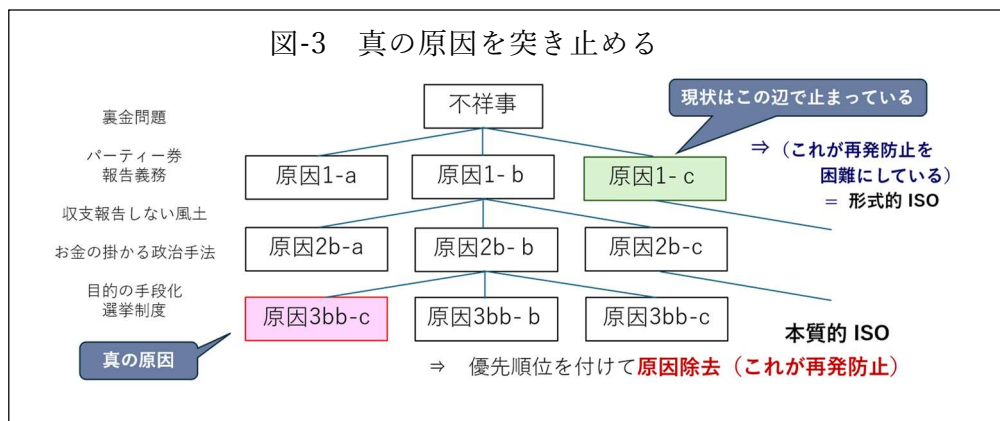
- ① どうやって、活動課題を決めたらいいか
 - ② どうやって、それを実現させたらいいか (うまくいかなかったときの処理の仕方も入る)
- 自らが目標を定めてそれを実現させ、環境活動の成果を顕現化しようというものである。

社会に目を向けると、最近、好ましくない出来事・不祥事が多発している。思い付いたも

① 戦争：ウクライナ、イスラエル	⑧ 金のかかる政治
② 能登の復興遅延	⑨ ノウハウの断絶
③ 人手不足	⑩ 選挙制度
④ 医薬不足	⑪ 税金とバラマキ行政
⑤ 品質管理不全	⑫ 感染症対策不全
⑥ 東京都の選挙	⑬ 情報公開しない政府
⑦ 都市乱開発	⑭ 無差別殺人

のを挙げてみる（表-1）。これら不祥事の原因は ISO の示す「仕事の基本」がきちんと行われていないことも一因である。その基本とは、不祥事の処理の仕方である。ISO では、うまくいかなかったときの処置として3つを上げている。1) **応急処置**（不祥事を正す）、2) **是正処置**（不祥事の原因を取り除く）、3) **予防処置**（潜在する原因となりそうなものを取り除く）。

そして、原因を追究するのに「なぜなぜ5回」がある。見つけた不祥事の原因がなぜ起こったのか、その原因を深掘りすることである。これを繰り返して真の原因を突き止め、それを除去する（図-3 参照）。この方式を徹底すれば、否応なく不祥事は減る。不祥事が減らない～増えるのは**原因追究と是正処置を行わない**からである。



例えば、裏金問題。報告義務違反が問題になり法改正されたが、深堀り不十分である。なぜ報告しなかったのか、報告しない風土があったからではないか。なぜそのような風土があったのか、お金の掛かるのが当たり前の政治手法だったからではないか。なぜ政治にお金がかかるのが当たり前なのか、選挙制度や議員の倫理観－議員をやりたくて議員になった（本音）と、世の中をよくしたい（建前）－の問題が根底にある。真の原因を放置し、上辺の問題だけを処理しても不祥事は再発する、当たり前。だから、不祥事に対しては**原因追究に力を入れる**べきなのである。そうすれば、世の中は良くなる。

原因が突き止められないことには、後述する議論の仕方も関係しているだろう。

さらに活動に取り組む姿勢の問題がある。取り組む姿勢に3つある。

- 1) 好きなことをする、2) 出来ることをする、3) なすべきことをする

ISO 認証制度はその実施状況を証拠で判断し、活動を行っていればどんなものでも認証取得できる仕組みになっている。そこで多くの会社は2)の出来ることをする方式を採用して認証取得を進めた。しかし、ここに落とし穴があったように思われる。2) 出来ることを

することは、現状の延長線上で発想することに留まる。3) なすべきことを行うことで未知の領域へ挑戦ができ進歩へとつながる。2) と 3) のバランスが大切だ。しかし、内容を問わずに認証する認証制度は 2) に偏る傾向を生んでしまった。開発という行為は、技術的コスト的に難しい問題などに取り組み、それを乗り越えるところに意義がある。その困難克服の後押しを ISO はできなかった。物事にはバランスが大切である。「出来ること」に偏り過ぎ「なすべきこと」が疎かにされてしまった。このような姿勢は原因の追究にも影響しているだろう。不祥事の第三の原因である。

不祥事が多発するのは、多くの組織で ISO の神髄である仕事の仕方の活用が不完全で、本質を突いた議論が進まないところに一因がある。本来、不祥事は改善の切っ掛けになる貴重なチャンスなのだが、それを活かせていない。**知的体力**（自分で考える力）がなくなった。その付けが顕現化している。仕事の専門家がないということ。これは仕事の技術論。

ISO が当初の狙い（環境活動実績）を実現できなかった基底には思想の問題もある。企業には**利益志向**、**成長志向**があり、メリットの見込めるものに注力する、という活動姿勢があるように思われる。もちろん、それは大切なのだが、それだけでは地球の問題の解決策とならないということだろう。コスト志向や成長志向から足を洗うのは容易なことではない。そのような中で、人新世の見方が、**新たな価値観**を構築し 3) なすべきことへ挑戦する後押しとなることを期待したい。（人新世を考える（2）につづく。）

参考資料

- 1) SDG s、外務省訳（2015）、<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000101402.pdf>、
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/pdf/000270935.pdf>
- 2) Steffenn W. et al.(2015) The trajectory of the Anthropocene: The Great Acceleration. *The Anthropocene Review*. 1-18